つてをることが明かである。是等の發達からして遂にスチルネルの所謂完全の個人——一點私の心なく、微塵卑劣の精神なく、高尙偉大にして日月と其光を同うすべき程の人士を得ることは、決して絕對に不可能ではあるまい。ニイチエの所謂超人なるもの——超然として俗塵に越へ、天と其高さを爭はんとするが如き人物も亦必ずしも之を得ずと云ふ筈はないのである。人類が若し多く斯かる性格あるものと進化したる曉には、どうである。愛がある、仁がある、自由である、完全である、プルードンの所謂正義は行はれやう。クロパトキンの所謂相互扶助も行はれやう。グラウエの所謂友誼的共和も亦現はれやう。誠に能く之が僞善なしに行はれるに相違ない。蓋し多くの個人が多くは皆斯かる高尙なる人格あるものとなるを以てゞある。社會は卽ち斯かる高尙雄大な人物の集合場となるであらう。然らば則ち敢て强制的の事を要さぬ。强制權力を以て生命とする政府——人の上に人の權力を設置する政府を〇さぬことになるは請合ひである。然らばダーウインの進化論は必ずしも無政府主義を兇ふ所以ではあるまい。〇かも之を察せずして生存競爭の見よりして無政府主義の夢想なるを語るは誤見たるを免れまい。

「其他の學徒」

クロパトキンの學徒はレクラス、グラウエの外に、尙ほ多くある就中ダニエル、サアランと謂ふのは、無政府主義は無秩序を語るものだとする反對論に答へやうと欲して、『無政府主義と秩序』と題し

た一書を著はしてをる。

「無政府主義の哲學的根底」

之れは無政府主義の哲學的根底を求めやうとしたものであるから一顧の價値がある。彼れ論して云ふ、『凡そ人には二つの要素がある。一は人の人たる所以の人と謂ふ思想である。他は差別的の人である。前者で見ると苟も人であれば平等一如、誰れも彼れも人の人たる所以の人である。後者は之に反して境遇事情に依つて各人悉く差別等差のある人である。而かも一般に人と云へば皆此の二要素を含んでをる。差別の點より見れば階級あるは免れがたいけれども、人の人たる所以の人として見れば、方に平等である。他人を尊敬し他人と共同和睦して毫も相戻らざるべきものである。是れ眞の我の發現したる所以、此眞の我の發現したる社會は自由の社會である。完全なる吾人の社會である。若し人が斯の如く皆人の人たる所以の人となつて社會を成さば、決して人の上に立つて人を制することを欲しない。人の下にあつて制せらるゝものがない。自他は唯我の中に平等一如に現はれて廓然として障礙する所がない。故に法律を要さぬ。政府を要さぬ。我もなく彼れもなく、唯方に『人』としてあるのみである。此場合には自然にして秩序が具はる。卽ち無政府主義の語る所は實に玆にある。無政府的社會は必ずしも秩序なきものではない』と誠に然りだ。人が苟も眞に人たる所以を全うして立たば、何等の組織を要さず、何等の駕御を須ひず、圓融太自在の境に入るを得る。無政府主義の極致は、其

社會的なると個人的なるとを問はず、方に茲に歸さねばならぬ、

此他女性の無政府主義者ルイズミイチエール、爆烈彈强盜の嫌疑を受けたエリヴアン、社會學者のハーモン、伊國共產黨のシヤール、マラトー、バクーニンの友人カルロー、カフエロー等皆無政府主義の大家であるが今一々之を語るの遑を得ない。其中でハーモンは流石に社會學者丈に、如何なる人が無政府主義者たるかを觀察して云ふ『無政府主義者を信ずる人を個人的に見れば、深厚なる他愛心、强烈なる正義の感情、人道の熱愛及び論理心なるものである』と是れ亦方に然りである。是等の心なきものが强制的の社會を嫌ふて、自由完全の社會を望む筈は毛頭あるまい。

第六章　獨英諸國の無政府主義

「無政府主義と地理的關係」

無政府主義の思想の傾向には、不思議にも地理的、人種的の關係がある。スラブ人種——露國人——とロンマン人種——所謂ラテン民族、佛國人の如き——との間に行はれたる無政府主義は動もすれば急激で、そして實行の非常手段が伴ふてをる。即ち前章までに觀察したブルードン、バクーニン、クロパトキン等の無政府主義は是れスラブ人種やラテン民族の間に生じたもので、そして論調が急激で、又往々實行の非常手段を伴ふてをる。然るにスチルネルの無政府主義は之に反して思想の傾向が哲學的で温和で、そして全く實行を語つてをらぬ。即ちチユトン種族の間に出たもの、過激でないことを證してをる。啻に之で證してをるのみならず、以下本章で說く所は多く之を證してをる。

斯の如きは抑も如何の原因に出づるかと云ふに、或は其人種の氣風に大關係があると說く人もあらうが、主としては其人種の政治組織の如何に關してをると想はる、のである。ラテン民族の中には自由の政治をなすものもある。佛國の如きは王政、共和政、帝政、又共和政、走馬燈の如く種々の變遷はあるが、必ずしも自由を無視したのみではない。けれども其社會の組織は一種の壓迫を存してをる。個人の自由は比較的に伸びてはをらぬ。殊に英國民に比すれば大ゐなる懸隔がある。此民族の間に出た無政府主義が其論調の急激なは卽ち其環象の然らしむる所である。而かも亦之を露國のに比すれば

其實行の非常手段に出づるの點が全く異なつて、殆んど非常手段と謂ふものを認め得られぬ。是れ蓋し露國の政治組織が非常の壓迫を主とするに因て、其反動として爾かく無政府主義の實行々爲が激烈なるを致すに反して、佛國の夫れが露國ほどに甚だしからざるが故に、亦爾かく無政府主義の夫れが過激でない所以である。斯く觀察し來ると前にも屢ば謂つた如く、暴政の下には必ず血の無政府主義がある。政治、社會の組織の壓迫の度に比例して、無政府主義の寬猛激否を異にしてをると謂ふ斷定の愈よ誤らぬことを明にしてをる。

「チユトン人種間の無政府主義」

議論は暫く措いて、獨英諸國に行はるゝ無政府主義が如何なる形式を以て現はれてをるかを觀察しやう。獨英諸國卽ちチユトン民族の間に生じた無政府主義は多くは個人主義で理論的で、適ま然らざるものがあつても、一般に温和な態度をなしてをる。第一に其名から頗ぶる平和である。曰く自由鄉、曰く排權主義、曰く統一主義、曰く統一基督主義、曰く隨意主義と見るからが恐ろしげなものではない。而して其說く所は如何。之より順次にそれを觀察しやう。

*　　　*　　　*　　　*

「ヘルツカーの自由鄉」

近世に於て好評を博したる書の中に、『自由鄉(フリーランド)』と題したのである。之れはプルードンの社會的無政

府主義を基礎として造られた未來の社會の有樣を書いたもので、卽ち一編の社會小說である。著者はテヲドル、ヘルツカーと謂ふ人で、千八百四十五年七月ブタペスタの出生である。此『自由鄕』を著はしたは千八百八十九年の事で、ムーアの『架空鄕（ユトラピア）』、ベラミイの『百年後の新社會』等と同じ種類の書の中では、最も成功したものだとの評判である。

然らば『自由鄕』は何を語つてをる乎。無限の自由と無限の公共心とを以て造られた社會の有樣を語つてをる。此社會を稱して自由鄕と云ふ。自由鄕の人民――と云つても決して別に君主と號するものや、貴族と稱するものはない。全く唯人民のみである――此人民は各人皆世に需用ある一切の物品に就て、何れも相當の知識を持つてをる。又各人は何れも如何なる事業にも從事し得らる、技能を有してをる。されば自由鄕の人民は――老幼不具者等僅少なる例外はあるが――一般に隨時利益ある事業に從事して、其生產を營むの力もある、權利もある、何人と雖此權利を妨害せらるゝことはない。

扨て此自由鄕には最も發達した統計局がある。隨時生產と消費との統計を作つて、時價の變動を最も迅速に鄕中全体の人に報告する。玆を以て鄕中の人民は各々其適當と思惟し、又利益ありとする事業に從ふことが出來る。併し此鄕では生產事業の資本は――生產器具に至るまで――個人の私有を許さない。之は一切社會の公有である。依て各人が右の生產事業を營むには、之に必要なる一切の機械器具はどうするかと云ふに、之は皆各人の隨意使用を許してある。使ひたいものは自由に使用するの

である。けれども之に對して利子だの、損料だのと謂ふものはない。使用濟みの上、若しくは生産事業の結果に依りて返戻すれば宜いのである。

斯かる事業は皆概ね組合仲間を設けてやる。此組合への出入は各人皆自由である。卽ち自由の組合を造つてそして斯かる事業に從ふのである。此事業から生じた一切の生産物に對しては、此事業に關係した各人が、其勞力の如何に依り皆公平に配當を受け得べき權利を有する。各人の勞働は全勞働時間を其事業關係人の全頭數で割り、そして公平均一に勞働を割當て、決して長短偏頗あるを許さない。而して此事業から生じた一切の利益は資本を社會に返戻し、又自由鄕に於ける租稅を引去つて、其殘る所を此事業の全關係人に平等に配當するのである。中途で此事業の組合を脫したものは、豫め其利益の得分に匹敵するほどの負債をなすことを許されてある。此事業組合に於ける最上の權力は、之に關係した各人が平等に權利を有する總會議の握る所で、又其事業百般の指導は此總會議の選任した支配人がするのである。そして此支配人の監督は總會議の爲す所である。故に此事業組合には主人と云ふものがない、雇人と云ふものもない。固より之を私有するものはない。皆職工、勞働者で亦皆主人公である。資本家と謂ふものはなくて皆資本の借用人である。

此自由業では一般の事鄕が皆此風で經營されてある。耕作も亦そうで土地を私有するものはない。隨て小作もない。皆此風で耕作してをる。故に皆公共的の事業ばかりで、一個私人が秘密に經營する

所の私有事業は全くない。或る少數の資本家があつて自餘の人を束縛して其自由を妨害する樣な制度は、社會に一つの影をも止めない。皆各人の自由を充分に發揮させる所以の善良な生産事業のみである。之が爲に生産と消費との統計を最も迅速に全社會に報告する所の統計局があるのだ。

然らば此自由鄕の一般の最高權は、何れにあるかと謂ふに、人民全体の爲にする中央銀行にある。此銀行は同時に全鄕の人民の世話掛である。卽ち各事業組合のみならず各個人の爲に會計の任に當つてをる。一目瞭然たる計算薄が備へられて、細大總ての收支計算を明にしてある。蓋し此自由鄕では各事業組合、幷に各個人共に經營が各孤立ではない。皆共通でそして皆此銀行の本支店で扱つてをる故である。隨て各個人は何時にても此銀行から自由に負債を起すことが出來る。而かもそれは他日己れが得る所の事業の配當又は此自由鄕から給附する所の手當で、方に計算が立つて行く。

但し斯かる自由鄕でも豫算がある。而かも其豫算は唯勞働することを得ざるもの——老人、病人、小兒、婦女、不具者、及び直接勞働に關係することを得ざるものに與ふる手當、幷にその附屬費に關したもの、みである。司法、警察の事務、陸海軍、財政等に關した經常若しくは臨時費と謂ふが如きものは一もない。元來此自由鄕では裁判官も警察官も俸給がないからである。そして是等直接に勞働に關係することを得ざるものには、社會からして方に手當を與へてある。又此自由鄕には刑法、民法と云ふ樣な法律が一もない。何故かと謂ふに、此鄕の住民は前に云つた如き組織で皆職業がある。公平

な利益の配當を受ける。職業に就き得ざるもの――老幼婦女不具病人等――には手當が給してある。何人も困窮しない。何人も暴富を得ることが出來ない代りに、貧弱缺乏に陷らない。皆相當の生活をして居る。故に皆心が正しく行ひが潔い。窃盜、强盜は一人もなく、犯罪と謂ふことが殆んど全くないのみならず、民事の訴訟を起すものも亦跡を斷つてをるからである。併し萬一何にか爭ひが起れば仲裁々判を受ける分の事で、爲に仲裁局がある。裁判官はそこに居るのである。若し萬々一惡事を働く人があれば夫れは、心意上若しくは道德上の病人だとする。病者として其治療を加へるのみである。『衣食足つて禮節を知る』で、ヘルツケーの自由鄕は、先づ人民の自由就職、自由事業、利益の平等配當、婦女老幼病者不具者等の社會給養、全社會の費用共通、中央銀行の組織等を以て、各個人の衣食の安全を計り、而して法律を要せず、政府を要せざる平和幸福の狀態を描き出したものである。是れ即ちプルードンの無政府主義を具體的に語つたものに外ならぬが、當時歐洲の讀者社會は大いに此書を歡迎したとの事である。矢野龍溪氏の『新社會』も亦之れと同巧異曲のものと謂ふを得やう。

*　*　*　*

「ダフエリングの排權主義」

茲に一方に於ては、總ての制度、權勢を否認する――プルードンの無政府主義の如き――に反對し、他方に於ては、力を以て造れる現今の國家組織に反對して、而して歸する所無政府主義となるの說を

唱へた人がある。之をエウゲン、ダフエリングとし、其説を排權主義と云ふ。ダフエリングは其著『近代の精神』に於て、プルードン、スチルネル、クロパトキン等が一切の權勢の存せざる社會を希望するを咎め、斯かる社會を求むるは啻に政府の組織を破壞せんとするのみではなくて、社會全体の組織を破壞せんと欲するものであるから不可である。如何なる社會に於ても、一定の度に於ける組織は必ずなかる可らざるものである。唯其組織は各人の完全の自由に出でたものでなければならぬと說いてをる。されども亦他方では、不正の權力を以て造つた政府や國家は必ず改革しなければならぬ。元來社會を成す所以に二つの相違がある。一は他に壓せられて成つたもの、他は自から己れの發意を以て成す所のものである。他に壓せられて成つた社會は現下の國の如きもので、一切の個人は決して自から主人たるの權利を有することを得ざるものである。自から成す所の社會は之を成す所以の要素たる各個人の自由に出たものであると說いてをる。此二つの區別は恰もプルードンの財產に關する思想に合してをる。ダフエリングは目下に於ては『富は物と人との主人である』と謂ふこれは社會主義の大家エングルスが『富は物の主人であるが故に亦人の主人となつた』と云ふと同じく人が物の爲めに奴隷となつたを嘆じた言であるが、併しダフエリングは斯く嘆じて而して更に謂ふ、物の上の主人たる富は正當であるが、人の上にまで主人たるは不正であるど是れプルードンが『財產は盜賊である』と謂ひ、而して更に『亦財產は自由である』と謂ふと同一意で、財產の私有は不正であるが、其使用は自

由である。物の上に主人となつてをる富は正當であるが。人の上にも主人となつて、又之を以て人を壓して而して造つた社會は不正の甚だしきもの、改革せざる可らずと謂ふのである。乃ち人が何物にも主人となつて社會を成さねばならぬ。其社會を人格ある社會と謂ふ。人格ある社會とは、之を成す各個人が共同一致を以て、其高きより低きに至る迄、各自の必要物は固より贅澤に屬する物まで、各々滿足に之を得る所以の組織体である。此組織体は君主專制でないことは勿論、或る特權を許す社會でもなく、富が人を支配してをる社會でもなく、又宗敎的壓迫の加へらるゝ社會でもない。全く自由の人格ある人の結合体は、矢張り强制的の事の許されない社會卽ち無政府である。さればダフエリングは一方に於ては富が人の上に立つて其主人となるが如き財産制度――目下の國家制度の如き――に反對して切に之を改革せねばならぬとし、他方にあつては、社會の基礎は正當な財産所有制にありとして、卽ち人格ある人衆の主人たる社會を唱へ來たつたのである。

之を要するに人格ある人と謂ふは、高き道德性格の人、スチルネルの所謂完全の個人、決して富の力を以て社會に橫行跋扈をしない。貧困に陷つても富の爲に左右せらるゝことがない所の人物を謂ふのであらう。斯かる人格ある人を以て社會を組織すれば、今日の如き强制的な政府を要さぬ。又國家をも要さぬのである。ダフエリングは此人格社會說から進んで、低い人格の人は卽ち完全なる社會組織の妨害であると論じ、更に一轉して猶太人種を低い人格あるものと斷じ、彼等を排斥すべしと論じ

てをる。茲に至つては歐洲人の人種的迷信と云はねばならぬ。

＊　＊　＊　＊

「エヒデイの無政府主義」

ダフエリングの反猶太主義に反して、基督敎主義を以て無政府主義を語つた學者がある。彼れは名をモリツ、ホン、エヒデイと謂ふ。千八百四十七年八月普漏西に生れた。初め陸軍に入り中佐にまで昇進したが、後ち軍職を離れて獨學自修し、遂に基督敎主義に起り一種の無政府主義を說いたのである。無政府主義の言論は多くは——スチルネル一派を除くの外——社會主義的で經濟問題に重きを措いてをる。經濟問題の解決は即ち無政府主義の所現を期する所以であるとのやうに說く。然れどもエヒデイは全く其立脚點を異にしてをる。彼れにあつては經濟問題は決して重要なものではない。然らば何を主要とするかと謂ふに、統一基督敎主義である。

「統一基督敎主義」

統一基督敎主義とは神に近い人道の理想のことで、此理想に適つた人の統合一致を說くのである。而かも基督敎主義とは云つてをるが、夫れは世に謂ふ基督敎とは解釋を同うしてをらぬ。別種の一宗敎を語るのである。道德的生活を談ずるのである。故に通俗なる基督敎徒の謂ふ所の獨斷論とは異つてをる。そして宗敎なるものは實行的のもので、各個人の生活を純粹無垢の地に誘導すべきものである。

決して宗派宗制を設けて人を覊束すべきものではない。故に敎會を造くるは宗敎の精神に戻つてをる。既に宗派を要せず、敎會を要せずとすれば、何をか要するやと謂ふに、地上の樂園に人を導く所以の信仰ある人格行爲を要するのである。

彼れの國に對する見解に從へば、國とは强制力と恐怖心とを以て造つた柱の上に置かれた存在である。斯かる國を存在せしむるは、治める、治めらるゝと云ふ區別を設くるを不可とする神の意に戻つてをる。或は人は理想の國を現じて之に住むことの出來るものではないと論ずる人があらうも知れぬが、論より證據がある。昔しヱデンの樂園では吾人の祖先が神の攝理の下に、政府なく國家なくして樂しい生活をしたではない乎、上古の人民は樂園に住めたのに文明を誇る吾人が地上に樂園を造り得ぬと謂ふ道理はない、吾人は自から奮つて之を造らなければならぬ。固よりアダムの時代は過ぎ去つた。昔しを今に返へすべくもないから之を恢復することは勿論出來得べきでない。然れども未來に別な天國を造ることは、決して不可能ではない。夫れには檄文や敎系や又行政を要さぬ。唯『正しい人』を得さへすれば吾人の目的は達せらるゝのである。此『正しい人』と謂ふ思想は即ち虔敬至誠、毫末の邪念なく微毛の私慾なく、廓如として天地六合と融和すべき偉大の人格を指すのであらう。こは是れスチネルの所謂完全の個人——全く私の心あることなき個人に似てをる。唯之を宗敎的にしたまでゝある。クロパトキンの相互扶助の感情と謂ひ、プルードンの正義の思想も、歸する所は斯かる人に存するの

であらう。無政府主義と人の性格品位との關係は各家の等しく着目を忘れざる點である。

「統一督基敎國」

されば彼れの統一基督敎國と謂ふは、一方では社會主義的であるが、他方では實に道德中心主義である。若し人の精神が全く一變して至善至美、一點の邪慾なく半點の私心なく、光輝燦爛たるものとなつた曉には、社會問題は果して何れに生ずるや。煩はしい事も苦々しい問題も、皆悉く消滅して仕舞ふ。誰れも彼れも斯かる事に懊惱煩悶するの愚を演じない。皆悉く正しく自己の生活を全うする。秋毛たりとも互ひに相狂すことがなくなる。世界は全く平和に歸して政府も法律も入用でなくなる。或は財產問題はどうならうかと問ふ人があらうが、今日の如く財產問題が社會紛雜の中心となつてをるは、人の精神理想が圓熟しないからである。若し一朝其精神理想が一變して世界人生に對する觀念覺悟が全く異なつて仕舞ふたならば、財產に對する思想感情も亦全く異なつて仕舞ふべきである。人が皆私心を去つて無慾圓滿となつた時には、財產は何等の價値もなくなる決して苦悶すべき物でなくなる。此時にあたつては果して今日の如き財產問題があるであらう乎。夫れは斷じてない。乃ち皆曙光に接した時には、吾人は全く新生涯に入る。政府、法律、社會等一部外部から强制する所以の制度を要さぬ。人は皆獨立自尊、自治自主にして、而して無爲にして治まつて行く。斯かる狀態を統一基督敎國と謂ふのである。

茲に謂ふ獨立自尊はヱヒデイが殊に深甚の意義あるものとして說いた所である。而して人は自由、平等の二思想を以て最も重要なるものとしてをるが、之れにては未だ充分の意味を盡さぬ。人に於て最も重んずべきは獨立自尊である。各人皆之を守つて少しも犯さず、又犯されざる時は自由と平等とは自からにして現じて來る。然らば則ち天國は地上に布かれる。統一基督敎國――即ち無政府圓滿の域に入ることを得るのである。

即ちヱヒデイは純然たる無政府主義者である。獨立自尊の人を得て、一切の强制的組織を消滅させやうと欲してをる。茲を以て彼れは更に無政府主義の名稱に就て論じて曰ふ、『無政府主義(アナーキズム)と謂ふ名稱は宜しくない。此名稱あるを以て混亂の狀態と同一のやうに取られる。故に之を政府無用主義とか、圓滿無爲主義とか呼ぶが宜い。斯う呼べば誰れにも恐れらるゝことがない。之を要するに問題は吾人の頭の上に强制的な政府を頂くべきか否かと云ふにある』と。

「血の無政府主義と高尙なる無政府主義」

而かも彼れは血の無政府主義と高尙なる無政府主義との區別を立て、前者は極めて不可であるが、後者は吾人究極の所期でなければならぬと說いてをる。但し其血の無政府主義と謂ふのは、バクーニン一流の非常手段をのみ重ずるものを指したのである。彼れ更に一步を進めて、血の無政府主義は高尙なる無政府主義を現ずる所以の道程を妨害するものであると謂つてをる。

エヒデイは斯く純粹な無政府主義者でありながら、玆に一つ不思議なことがある。それは彼れが無政府主義を談じながら、君主制に反對しなかつたのみならず、君主制は獨立自尊の主義に牴觸するものでないと謂つてをる事だ。尤も其君主と謂ふ思想は露國や淸國のやうな所の君主とは全く違うてをる。即ち飽くまでも人民に屬したもので、人民の首班、公僕を見てをるのである。プルードンは曾て急調な無政府主義を說きながら、敢て君主に反抗することを語らないで、ナポレヲン三世の帝政をも寛假しやうとしたとの事であるが、此れと彼れとを對照し來ると頗ぶる奇異に感ぜらるゝのである。

* * *

「ヨハン、ハインリツヒ、マツキー」

獨逸は個人主義の國である。スチルネルの出た國である。エヒデイの現はれた國である。隨て個人的無政府主義の思想が多く現はれた。ヨハン、ハイリツヒ、マツキー(千八百六十四年生)も亦其一人に數へられてある。けれどマツキーは系統的に自己の理想を語り出でたのではない。ヘルツカーの『自由鄕』に學んで、一種の小說を作り、そしてスチルネルの所謂完全の個人の理想を具体的に說明した。其著は『無政府主義者――十九世紀末の社會書』と題したものである。そして個人的無政府主義と共產的無政府主義との相異なる次第をも語つてをる。然れども一も獨創の見はないやうだ。スチルネルの理想をヘルツケーの方式で現はして、そして共產的無政府主義との別を明にしたまでゝあるから、今

玆に多く說くことを要せまいと想ふ。

* * * *

「フリドリッヒ、ニイチエ」

エヒデイの基督敎的無政府主義を敍し來つて、スチルネル以來の個人的無政府主義の思想を說いた筆端は、惟ふに必ずや同しく個人的無政府主義思想を語りながら、全く基督敎的でない今一箇の敎系に亘らざるを得ない。其敎系と謂ふはフリドリッヒ、ニイチエの哲學的無政府思想である。或は放縱の論である。或は淫靡の見である、又或は輕浮の說であると種々の言を放つて、彼れを攻擊するもの我文學界に少なからざるやうであるが、歐洲でも一部には同樣の批難を加へた人があつた。けれども他の一部に於ては大いに彼を迎へた有數の學者がある。佛國の文學者テーンの如きは彼れの大著『ザラトストラ物語』を讀んで、遙々書を寄せて彼れの見を稱したとの事だ。惟ふに其批難を受けたは、反基督敎主義の最も激烈なるが爲めであらう。兎に角一代の學界を驚かした彼れの筆は頗ぶる見るべきものである。

或にニイチエを以て無政府主義者として算するを不可とする學者がある。其謂ふ所を見るに、ニイチエに無政府思想の傾向あることは明かであるが、併し彼れは强者の權利を認めて弱者の廢滅を悲まぬ。生存競爭の天則を尊んで優者の進化を喜んでをる。故に彼れは寧ろ貴族制を許るのであると謂ふ

にある。勿論彼れの或る時代に於ては英雄崇拜若しくは貴族歡迎の思想があつた。けれども全體を通じて考ふれば、今日の所謂國、政治に對しては分明に否認してをる。而して別に所謂『超人』の天地を雲煙縹渺たる間に描いてをる。是れ無政府主義を語るものである。

「イブセンの國家觀」

又或はイブセンの國家觀を覗ふに、彼れは『國は個人の兇詛である。國は去らねばならぬ。吾人は國と謂ふ觀察を撤せねばならぬ。而して眞に自由なる精神を以てする聯合體あるのみたらしめねばならぬ。是れ實に吾人の貴重なる自由の現せらるゝ初めである』と謂つてをる。トルストイの說を見るも亦同樣なる見がある。けれどもイブセンやトルストイは純然たる無政府主義者には算しない。之れと同じ次第でニイチヱも亦無政府主義者とは謂はれぬと謂ふ論者がある。而かも是れ唯程度の論である。イブセンにもトルストイにも無政府思想があれば卽ち之を無政府主義者の一として差支へなからう。唯本書に於ては之等餘りに其分量の少ない思想は紹介せざるまでゞある。ニイチヱは之等の二人よりも多く無政府的思想に富んでをる故に玆に之を紹介する。

フリドリツヒ、ニイチヱは千八百八十四年九月十五日獨逸聯邦中のロツケンに生れた。父は牧師で母は牧師の娘であつた。兄妹三人であつたが彼れが五歲の時父を失ひ、次いで兄を失つた。母と妹と一家三口、祖母の家に移つて、そこに幼時の敎育を受けた。祖母の死後亦外に移つて少年の時代とな

つたが、教育は頗ぶる好成績で後ちライプチッヒ大學に入り、博言學、神學を修め、出で、軍務に服して身を立てんと欲し、砲兵科の士官となつた。然るに或る日落馬して痛く胸を打撲して病を得た。爲に軍籍を離れて更に亦學問を以て身を立てんと欲し、ライプチッヒに還へつて學位を得、バーセル大學に於て博言學の敎授となつて十年勤續した。夫の有名な樂音家で哲學者なるワグネルと親交して初めは頗ぶるワグネルを稱揚して居たが、後ち其間に意見の相違を生じ、ワグネルとの交りは絕たた。爲啻に絕たたのみならず相反目するが如き有樣となつてニイチエの背信を攻擊するものをも生じた。爲に彼れは『ワグネル問題』などの著を出すに至つた。彼れの著書は其他併せて大著八九種小著も少なくないやうである。皆文藻の妙を以て稱されてをる。就中『ザラトストラ物語』は有名なものである。彼れの哲學は初めショッペンハウエルから出て、そして後ちには自家獨立の見を開いてをる。ショッペンハウエルと同じく世界は悲しきものである、悲痛の充滿してをる所であるとしてをるが、而かも其師と異なつて、其悲しみの奥には大いなる喜びが潜んでをる。世界は深いものであるから悲しみを皮相として深く大いなる喜びが底に潜んでをるとして悲觀から樂觀を語つてをる。これはダーウキンの進化說を取つて、人類の進化の極は完全なるものとなるべきを信し、此進化の極の完全は即ち超然昂然たる人である。『超人』である。神性的の人である。玆に達すれば、今日の如き僞善な虛儀な煩瑣な俗惡な社會は消へて仕舞ふと說いてをる。千九百年八月廿五日腦病の爲めに死去した。一代殆んど筆

を握つて立ち辛辣な言奇峭な文を以て聞へ、其『ザラトストラ物語』の如きは、言々句々皆金言的であると或る評家の評した程である。其既に病んで脳に異狀を呈した時と雖、筆を執つて机に對すれば、思想明晰一絲の亂れたる迹がなかつたと謂ふ。一代の天才である。

「超人論」

ニイチヱの無政府主義は、スチルネルの『完全の個人』、ヱヒデイの『正しい人』の思想と幾んと同一形をなせる『超人』の理想から來る。彼が一代の名著『ザラトストラ物語』は、此『超人』を敎へんが爲めのものである。但し『ザラトストラ物語』と謂ふはペルシア火敎の祖と稱せらる、ザラトストラ――英語のゾロアスター――の名を借りて茲に架空の一道士を出し、其口を以てニイチヱの理想を語つたものである。卽ちザラトストラが物に觸れ人に對し事に遭ふて、以て超人の理想を說敎すると謂ふ趣向である。これ故にニイチヱの無政府主義は、プルードンやクロパトキンやスチルネルやの如く、自から打出して我は無政府主義を語るとは謂はない。唯其理想の結果が玆に達するのである。玆を以て學者或は其超人を誤りて貴族的のものとするが、これは全く誤りである。ニイチヱの所謂『超人』は今日の所謂貴族とは全く異つてをる　固より高く超越した人格であるから、高い貴い人ではある。けれども其高い貴いと謂ふのは、金錢や財產や社會上の位置にあるのではない。現在の社會に超越し俗社會の善惡に超越し、總ての煩瑣と總ての束縛とを絕して、獨り高く超然として神の如き慾望意志ある。

人物である。恰もザラトストラ其人の如き人物を謂ふにある。霞を食ひ雲を吐くの山仙にも似たる一種脱俗超凡の道士である。今日は斯かる超人は世に居らぬ。或は辛うじて其陰影を認めることが出來る。然れども人間の將來――遠い未來に於ては、進化發展の極斯かる超人を生じやう。斯かる人の社會は如何である乎。恰もザラトストラの住んでをる山の如く、帝王も乞食も蛇も鷲も高士も法王も、平等無差別である。皆笑つて樂しく踊つて暮らすのである。即ち無政府ではないか。超人は之を現ずる所以であるとすれば、ニイチエの超人論は是れ無政府主義であるのだ。

「最も冷酷な怪物」

更に亦彼れが現在に對する思想を觀ふに、彼れは今日の國を罵つて『最も冷酷極まる怪物』と謂つてをる。此冷酷な怪物は惡むべし、今は全權萬能にして何物何人でも啗ひ盡さなければ已まぬ。而かも『今の人は昔の人が神に一身を献げて顧みなかつたが如く、此冷酷の怪物に生命を献けてをる』。此冷酷の怪物に酷使せられ殘殺せられながら、尚甘んじて悅んでをる。愚の極、馬鹿の骨頂である。『人は向上せざる可らざる動物』で、自由の發展をしなければならぬのに、斯の如き事をしてをるは何たる事だ。然らば今にあつては吾人は如何にすべき乎。即ち超然として超人を學ぶべきである。●人を學んで一世に超越し、超然として笑つて生活すべきである。斯の如くして子々孫々進化發達せば眞に超人に達する時が來る。ザラトストラ卽ちニイチエは此超人を敎へんが爲に出たのだと論してをる。而して此

境は何んであらう。即ち無政府ではない乎。さればニイチヱは無政府主義の所現を個人の進化發展に求めたのである。而かも亦今に於ては其超人を學んで一世に超越せよ、脫俗超凡の生活をなせよと敎へた。即ち今日唯今に於ては、個人の超越を以て個人的に無政府主義を行へと謂ふに同じいのである。茲に至つては個人的無政府主義の頂點であらう。蓋し個人的に各自超人を學んで超然たれ、無政府たれと說くに外ならねばである。スチルネルに發した個人的無政府主義はニイチヱに至つて其極所に達したと稱して宜からう。

* * *

「兩無政府主義の代表者」

スチルネル、ヱヒデイ、ニイチヱの三人が語る所は、固より同一でない。非基督主義、基督主義、進化主義等各々特殊な點がある。然れども個人の發達進步を以て、無政府主義の實現を期すと云ふ一點は同じである。プルードン、バクーニン、クロパトキンの三人が語る所も、亦固より同一ではない。集產主義、破壞主義、共產主義等各自特殊な點がある。然れども社會經濟の改革を以て無政府主義の實現を期すと云ふ一點に至ると同一である。而して前者三人と後者三人とを對照すれば、一は個人を主とし他は社會を主としてをる。其一は吾人の內部の改革を談じ、他は吾人の外部の改革を語つてをる。即ち一は心意性格の發達に重きを措き、他は境遇事情の變更に力を盡してをる。兩者は全く混同

すべからざる別がある。惟ふに此兩者は個人的と社會的との兩無政府主義の大いなる代表者と見て可なりである。田を行くも畔を行くも同じ道に出でらるゝのであらうか。而かも何れが果して根本的の順道であらう乎。是れ大いに觀察に價へする所である。

「其の區別」

而かも此觀察をなすは暫く之を措き、此兩無政府主義は何れが果して實行の非常手段となり、往々にして危激の道に陷るの恐れがあるかを尋ぬるに、個人的なるは人心にのみ關してをる。社會的なるは社會の制度組織に拘はつてをる。前者は擧動を以てしては如何ともすべからずで、必ずや理論を以てせねばならぬ。然るに後者は社會の制度組織に關してをるを以て、理論で談ぜられぬことはないが、而かも手を以て改革を實行することが出來る。而してそれが却て捷徑である。是を以て本來實行を試ましめんとする衝動たる所以の性質を有してをる。故に性質として前者は理論的、哲學的で非常手段に出づるものはない。之に反して後者は實行的、非哲學的で動もすれば非常手段に訴へるものを生ずる。卽ち各國政府をして振動して恐れしむるは全く前者――哲學的無政府主義――ではない。後者――社會的無政府主義――にある。況んや前にも屢〻說く如く各國政府の中――露國の如き――には暴政抑壓を以てして之が反動を買ふの愚をなすものがある。爲政家たるものは先づ其區別を明にし、而して亦其反動を買ふの愚をなさゞる所以の良政を行ふべきである。

此兩無政府主義の猛否を一層明瞭にする所以の二つの無政府主義がある。尙之を叙說して本章を終はらう。

*　*　*

「ヨハン、モスト」

一はヨハン、モストの無政府主義である。尤もモス〇は社會民主々義者とも目せられてをる。其理論はプルードン的のもので、實行に關してはバクーニンに輪を掛けたやうな事を云つてをる。而かもモストに一のは特色がある。それは『社會の決議』と謂ふ思想である。此社會の決議と謂ふのは卽ち社會全体の合議――云はゞ最大多數決を云ふにある。モストにあつては、此決議が金科玉條で社會の事は何事たりとも之で決定せねばならぬとしてをる。

モストは現に米國又は伊國などに徘徊して、居て片々たる小著、新聞雜誌の論文、檄文宣言等で己れの主義を語つてをる。其外には大著と目すべきものはない。而して彼れの論議する所を見るに、土地、動不動產は總て皆社會が所有者である。各個人は唯之を使用することを得るのみである、生產は其生產事業をなす團體全体の有に歸すべきもので一人一個の私すべきものではない。社會は總ての事業を爲す最も大いなる團體であるが故に總ての物は皆社會の有である。隨て物價は唯獨り社會の定むべきもので、決して妄に之を變更すべきものではない。消費は會社亦全体の人の共通にすべきもので

決して二三私人のみ多くを消費することを得べきではない。男女は最も自由に婚姻し、又最も自由に離婚することを得ねばならぬ。之に生れた子女は社會が養育すべきもので之を唯父母にのみ任すべきではないと論じてをる。社會的無政府主義の理論としては、殊に稱すべき所はないが、而かも彼れが實行を語るに至つては、誠に驚動戰慄すべきものがある。

歐米諸國に於て屢〻無政府主義者の會合が行はる〻が、現下に於てはモストの如きは其一領首である。

「無政府黨の綱領」

千九百一年佛國の一新紙が記載したる無政府黨大會の綱領なるもの〻如きは、モスト等の起草に拘はると謂ふ。今之を記せば、

(一)自由職業の事。

(二)社會の總ての財産、土地、鑛山、通信機關、生産機械等一切の社會の富を、例令へば水の如くに各人自由に使用する事。

(三)私有財産廢止の事。

(四)政府、階級、陸海軍、裁判所、貴族、官省政治の總てを廢止して社會的解放を行ふ事。

(五)無政府の事。

是等の數項を主張して、以て實行に訴ふべしと謂ふにある。現下歐米諸國の無政府黨と謂ふは斯う謂ふ旗幟を翻へしてをるもので、卽ち社會的無政府主義の主張を取つたものである。モストは是等の無政府黨に敎へて謂ふ、凡そ革命の科學的方法は唯一の爆烈彈にある。敎會、宮殿、球戲場、葬式場、祭禮等衆人の集まる所へ右の爆烈彈を投ずるにある。毒藥を以て人を殺すも亦其一方法であるとして明細なる毒藥字典を作つてをる。而して其殺すべきものは政治家、野心家、探偵であると說き、斯くして今の社會を破壞すれば新社會が出來ると主張して居る。此點はバクーニン一流である。先年北米合衆國の大統領マッキンレーをコルゴッツと謂ふ狂漢が殺したが、これはモストの學徒なるゴルドマンと云ふ婦人の演說を聽いて感奮した結果だと謂ふ。而してモストは當時公然マッキンレーを殺すべしと謂つてをつたとの事である。茲に至つては無政府主義も亦甚だ厭ふべきものである。

而かもこは是れ個人的のではない。社會的のであるが、併し無政府黨をして此狂暴を敢てせしむるは、露國の如き暴政抑壓が他の國にも存在して往々天下の義人を苦しむることがあるを憤つた結果である。されば唯無政府黨のみを罪するは固より眞相を誤つた見である。

* * * *

「アウベロン、ヘルバルトの隨意主義」

社會的無政府主義はヨハン、モストに至つて其性質を現はして過激の極に達してをる。之に反して

個人的無政府主義はアウベロン、ヘルバルトに至つても、亦決して其性質を失はず、矢張り温和で理論的である。而してヘルバルトは自から打出して無政府主義とは云はぬ。之を『隨意主義』と稱してをる。隨意主義と謂ふのは、どう謂ふ主義であるかと問ふに、今日の國は强制を以て人を服從せしめてをる。これ吾人の自由を亡みするものであるから、吾人が入るも出づるも絶對に自由な國とせねばならぬ。即ち隨意國である。其隨意國はスチネルの所謂完全の個人の團體、プルードンの所謂自由團體の聯合に似てをる。各個人が絶對の自由を以て相互聯合一致した所のもので、毫も他の干渉、强制を被らぬものである。而かもヘルバルトはスチルネルの如く個人の自由を重んずるを以て、其權利を貴び啻に其身体心意の個的能力を認むるのみならず、其能力に依つて得た所の財產は亦個人の所有に屬すべきものであるとしてをる。然れども此各個人は各自互ひに其自由を尊敬し、敢て己れの一個一人に私するものでない。之を誠に自由の人と謂ふ。眞の自由の人は自他平等の思想を忘れないに依つて、即ち一人暴戾を行はぬ。是を以て各自絶對の自由に依つて隨意の國を造くる。人は人の上に立たず、又人の下に居らず、互ひに平等の尊敬を以て團結してをるのであると是れ即ち亦無政府主義である。而かも彼れは之を實現するに實行を以てせよとは謂はぬ。人の内部に發する自由心よりせねばならぬと說いてをる。飽く迄も理論的、哲學的である。

*　　*　　*

以上で歐米近世の無政府主義諸說の梗概を說き了はつた。此他尚は多くの無政府主義家がないではない。北米のジョセップデジャックの如き、プルードンの學徒がある。同じくボストン市のタッケルの如きベルバルトの隨意主義に似た說を語つてをる。此他ヨシア、ワーレンの如き、ステフエン、パールの如き、ア　　ーの如き、リサンダーの如き、スプーナーの如き諸子がある。此等皆名を知られた人々であるが、著者は淺學で未だ能く是等の人々の說の梗概だも聞かぬから略して置く。

＊　＊　＊　＊

「著者の誠念」

余は政治組織を以て藥の如きものと信ずる。而して藥は或る意味に於ては毒である。故に藥の中と謂ふ矛盾の言葉が出てくる。防腐の良劑なるヨードホルムも多く用ゆれば中毒症狀を起し、解熱の良藥なるキニーネも時としては亦中毒することがあるさうだ。

然れども人に病氣のある限り、藥は廢すべからざるものだ。吾人が愚かなる中、奸邪なる中、野心あり嫉妬あり憤怨ある中は、病氣あるものとしなければならぬ。政治組織は已むを得ずして必要である。

而かも藥を用うるは何の爲めである乎。全く病氣を根治するにある。決して藥を用ゆるに及ばざる身体となるにある。斯かる身体となれば藥は無用である。吾人が知となり賢となり又德となつて、自から治め自から立つを得るに至れば卽ち全快である。最早政治組織の藥を無用である。

故に藥が身を用ひざるに至るを目的とするが如くに、政治組織は政治組織を無用とするに至ることを目的とすべきものだと信ずる。無政府主義は政治の究極の目的である。

然るに今日の政治組織は、各國ともに藥を多く用ひ過ぎた形である。中毒症狀を呈してをる。是に於て乎之を意識したものがあつて、飲藥廢止卽ち無政府主義を唱へ出したのである。中△症狀を除かんと欲して藥を全廢しやうと欲してをる。

然れども藥全廢――別言を以を云へば、毒藥打棄の意見に二種類ある。一は唯其中毒症を治するが爲に之を起した藥を廢して、別の藥を用ひやうとするにある。社會經濟の組織を變更して集產的又は共產的の社會にしやうと云ふのはこれだ。而かも是れは唯毒を退治するに藥を以てするのみで、所謂對症療法である。

他は中毒した藥は勿論廢さうが、其藥を用ゆるに至る所以の原因、吾人の心意性格の不完全を除かねばならぬ。社會組織の如き外部のものよりも、吾人の心意性格の內部からして治して仕舞はねばならぬとする。卽ち完全の個人を得やう、正しい人を得やう、又超人を得やうと叫ぶ。これは所謂根治療法である。

故に余は社會的無政府主義は對症療法で、個人的無政府主義は根治療法であると信ずる。

中毒を起した藥を廢しても、吾人の身体に愚昧、奸邪、私慾、不德等あらゆる病氣の原因があつて

は、適ま用ひた對症療法で、社會の組織を改めても、夫れは砂上の家ではあるまいか。中毒再發の恐れがある。

故に余は根治療法を說かんことを欲する。個人的無政府主義を根本的のものだと信ずる。就中超人を談じて吾人の超越を期するを、最も根本的であると信ずる。

天下の人が悉く知悉く賢とならば、野心の競爭や、利慾の爭奪や、名譽の心爭ひは其愚を意識されて忽ちに消へて仕舞ふ。財貨に對する貪慾も滅して仕舞ふ。善惡苦樂に超然として天地に笑つて其生を遂げられやう。

廓然として覺れば今に於ても、此境を我が一身に現せられぬと云ふことはない。余は這般の個人的無政府主義を喜ぶものである。

無政府主義終

附録

社會主義と個人主義

（一）

個人主義とは既に今人の耳に熟する所、社會主義も亦世の論者に依りて屢語らるゝ所なり。然れども純粹の個人主義、眞誠の社會主義は如何なるものぞ、余を以て見れば我國に於ては之を説くもの甚だ稀れなり、唯社會主義は『平民新聞』の主張其最も純粹なるを見る。同新聞は余の親友幸德、堺等諸氏の經營する所にして、今の俗惡なる風潮に逆ひ、善戰健闘すること方に識者の稱する所、余は實に大に之を尊敬す。而も同新聞は余を以て個人的無政府主義者なりとし、又絶對に社會主義に反對するものとなしたるが如し。

然れども余は之に對して敢て辯ずる所なからんとす。唯玆に所謂個人的無政府主義と社會主義との關係に就て、少しく說くことを要すと思惟す。

（二）

明々地に余の理想を告白すれば、誠に個人的無政府主義なり。而も其はプルードン又はクロパトキン若しくはバクーニンの亞流を酌みたるにあらず。さればとてスチルネルに私淑したるにもあらず。

實に天下の各個人が悉く賢となり智となり、今日の如き僞善なく虛儀なく、不德なく罪惡なく、隨て法律の如き道德の如き總て或る制裁を以て行爲に命令するものを要せざるに至れる時を想像しての事なり。斯の如き時代には政府の必要ある可らず。各個人は各自完全に自ら治めて、何等他よりの制裁命令を要せざればなり。

今日と雖誠に高德の君子あらば、彼れが身には法律も道德も又作法も必要なかるべし。超然として高く自から己れを治めて、敢て他の命令制裁を被むることなきを得ればなり。天下の個人皆斯の如く成らん乎。各個人皆太陽の如く又高峰の雪の如く、自然にして獨立自由に、高く且淸きことを得べし。此時に於て政府なるもの果して何の要かある。

畢竟すれば政府は俗人と愚人と痴漢猾奴との爲めに最大必要なる耳。彼等の一掃せられたる世には、卽ち人間に尾を要せざると一般、元來何等の必要もなかるべきものなり。

故に余は此境として、人間の之に達する所以の道を個人の進化に求む、人間が今日の如く尙未だ或る階級の猿猴たるを免れざる間は、其多くは俗なり痴なり惡なり而して又奸譎なり、彼れ等は到底或る束縛の下にあらざれば生活し能はざる厄介者なり。

（三）

國家と云ひ社會と云ふ。余よりして見れば桶に嵌めたる箍の如きものなり。而して各個人は是れ

其桶を作す所以の木片に外ならず。若し夫れ此木片にして昔の生木時の如く各自獨立し、自由に完全に自から治め、高く清風の中に聳ゑて生活することを得ん乎。何ぞ箍篚の束縛あるを要せん。抑も亦桶となりて他の苦役に供せられ、或は汚に染み或は傷を被むることを爲すに及ばざるなり。

然れども今木片は獨立せず、又自由ならず。而して桶を作れる惡漢あり。其惡漢は名を主權と云ふ。彼れや領土と名附る汚土を盛らんが爲に、成るべく大いなる桶を製作す。成るべく多くの木片を集めて甚だ頑固なる箍篚を嵌むるなり。是に於て乎桶は汚れたる泥土に染まりて厭ふべき色を生ず。各自の木片は又悉く之に染りて夫の天然なる生木の欝々蒼々たる自由の色を失ふ。憫むべきは今の木片なり。今の吾人なり。

然れども千萬歲の後枯木再び花開く時に遇ふ迄は、吾人は區々たる木片なり。或る階級の猿猴なり。國家の箍篚を要す、社會の桎梏も亦之なきことを得ず。是に於て乎國家主義あり。社會主義あり。余の理想は遠き未來の又未來にありて、今は其光明多くの人に認められず。明滅斷續、微々たり茫々たり。余は誠に憐むべき主義の信者なる哉。

（四）

然れども今の世には稀れには喬木の雲際に高きを見、猿猴を離れたる猿猴あり。彼れは超然昂然として桶屋の店頭に木片を笑ひ、動物園若しくは花屋敷の鐵鎖に縛されたる猿を嗤へり。而かも木片や

群猿や彼等は唇を飜して反て亦彼れを笑へり。

奇人よ、隱者よ、幣拗漢よ、狂者よ、馬鹿者よ、是れ彼れが彼等に呼ばる、の名なり。或は慾を解せざるもの、或は世渡を知らざるもの、是れも亦時として彼れが彼等に呼ばる、の名なり。而かも彼れや平然たるべく洒然たらん。而して自ら高く世外に超絶して、毀譽褒貶の外に立ち、或は猛鷲の如く、高山の絶頂にあり。或は鼹鼠の如く人の知らざる地下に潛み、悠々自から適するの生を營みて、以て詩歌を友とするもあらん、以て哲學を樂むものもあるべし。彼れや法律を要せず、道德を要せず、己れの意に任せて自ら治むればなり。即ち彼れに取りては政府なるもの、抑も何の必要かある。適ま以て租稅と戸籍との煩累を感ずるのみなり。

彼れが如き生活の趣味は木片や群猿の解する所にあらず。高風慕ふべき俳人哲士の間其髣髴を認め得べからざるにあらず。而して是れ個人的無政府主義が今の箟箆ある桶の中にありて、其所現を妨害せられ、畸形をなして發作せるものなり。

（五）

朝露を踏むは日光を見る所以の初にあらずや、畸形の發作あらば正形の所現必ずしも其なきを嘆ずるを要せず。今の世に於ても正形の所見あり、眞に高人と稱せられ君子と呼ばる、もの出でなば如何の生活をなすべき乎。彼れ自らに取りては、果して法律の束縛を要するや。道德の制裁を要するや。

抑も亦政府の御指圖を必要とするや。

他の俗人、愚人、惡人、痴漢、猾奴等との交際なからざるを得ざるに因て、彼等の爲めに法律、道德、政府を要することあるべし。若し夫れ誠に高人との間、君子と君子との間にありては何等他の制裁、命令、束縛を要せずして、何事をも治め何物をも賊ふことなかるべきなり。

而かも今日に於て斯の如き高人、君子を見る。曉天の殘星も啻ならず。又亭々たる大木を桶屋の店頭に見る能はざるが如く、世は殆んど擧げて木片なり、群猿なり。能く日光に於ける朝露たる能はずして、遂に風雨に先立つの黑雲たるを免れず。嘆ずべき哉。然れども古今三千歳其間稀れに眞珠を豚群に投じたるが如き、淸き朝露の一二滴を雜木醜獸の間に見ること必ずしも絕無にあらず。孔子を支那に見、釋迦を印度に見、耶蘇を猶太に見たりしが如き是れ此類にあらずや。

朝露は既に降れり。常に風雨の日のみ來るにはあらず。洌々たる日光を見る時なからざらんや。孔子、釋迦、耶蘇を今日に再生せしむるは難かるべきも、斯の如き賢智の性格を全人類の上に得る、其進化の極に於ては必ずしも不可能と云ふべからず。

斯の如き賢智の性格にして世界に滿たん乎。各自皆自から治めん。政府の必要は絕對的に之あるを見ざるべし。然らば余の理想は憐むべき主張にあらず。光明を遠き將來に見る所以にあらずや。

（六）

議するものあらん。然れども世は生存競爭の荒き風に吹かる。總ての人は之が爲に罪惡の淵に沈むべしと。或は然るべしと雖、生存競爭なるものは生物の始めて世に出でたる以來、曾て消滅したる時なし。而かも既に聖人君子の出現を見たり。今日と云ふと雖俳人哲士の間に畸形なる個人的無政府主義の發作あり。以て生存競爭の荒き風が此主義を吹き去る能はざるを證するのみならず、却て此主義の所現を早むべく進化の過程を催するものあるを見るべし。

社會主義を語るの人は、生存競爭を慘劇なりとして大に忌めり。之を廢滅せしめんと企てつゝあり。之も吾人をして安樂ならしむる所以の一方法ならん。然れども此競爭や生ある物の、否な總ての物の必有の屬性なり。若し人の肋骨を拔き去ること夫の神の如くなるを得たらば、卽ち人より生存競爭を拔き去ることを得ん。然れども是れ唯空想のみ、此點に於て個人的無政府主義は社會主義と立脚地を同うすること能はず。

今の生存競爭は如何にも慘劇を演ず。然れども是れ實は今の人――木片や群猿の演劇なればなり。桶の篋匳が固くして才片を締むること餘りに甚しければなり。若し夫れ高く淸く超然として神の如き慾望、佛の如き觀念を有し、自由に完全に獨立なる個人あり。同じ個人との間に生存競爭を爲さん乎。必ずや神性的の競ひなり。慘劇にあらず、極めて潔く快き戰爭ならずんばあらず。孔子と釋迦とソクラテースと耶蘇とゾロアスターとマホメットとをして同時代同地域に生活せしめよ。彼等は各々其面

の如く其心を同うせざれば、生存の競爭を爲すなきを得ざるべし。而かも其爭や君子なるべく、決して慘劇ならざるべし。況んや彼等よりも更に秀でたる進化を經たる個人あるに於てをや。其生存競爭は全く神性的のものたり。神的生存競爭是れ實に個人的無政府主義の一大條件にして、此競爭には法律を要せず、政府を要せず、唯個人の神の如く佛の如き自由の心に依りて支配せらるべき耳。

斯の如き生存競爭は卽ち人類の進化をして益々高からしむる所以の動機なり。忌むべく厭ふべき所以を見ざる可し。

然れども此境は遠き未來の又未來なり。吾人の目前に出現せしむる能はず、乃ち吾人の今の生活は夫の篾箍に締められざるを得ず。恐ろしき生存競爭の演劇を爲さゞる可からず。是に於て乎社會主義者は此演劇をして成るべく丈悲しからざらしめんとして、種々に社會の舞臺面を變せんと企つ。

（七）

曰く資本――土地の私有と云へる背影は少數の俳優をして良き役を占有せしめ、彼等のみを幸福ならしむる所以、卽ち多數の俳優の苦痛の種子なり。殊に其私有資本の競爭は大いなる愁嘆場を演せしむる所以なり。故に總て之を全廢して、以て資本――土地を毫も競爭なき社會全體の公有てふ大道具に變更せざるべからず。此大道具にして一たび人生の舞臺を飾るに至らば、總ての俳優卽ち人民は平等に其利を受けて幸福に演舞することを得ずしと、社會主義のアルフアよりオメガアはシャアフレの

云ふが如く全く之れに過ぎざる可し。

然れども善き演劇には良き俳優を要し、良き俳優は誂への道具を要す。資本――土地の私有と云へる背影は、畢竟すれば良き俳優――殊には畸形の俳優の誂へに成れりしものなり。之が因襲して今日の社會の舞臺面を成せるものなり。而して今日の俳優は門閥を貴ぶ。乃ち夫の背影は良からぬ俳優にても門閥家なれば之を飾ることを得るに至る。是に於て乎自餘多數の俳優は之を用ひること能はず。悲慘痛苦なる演劇に困殺せられんとす。社會主義は此悲慘痛苦の間より發明せられたる人生演劇改革の一大良法たるを失はず。

而かも唯道具の改革なり。背影の變更に止まる。『書き割』を廢して『ドロップ』となすの類のみ。如何にも社會改革の一大良法たるを失はずと雖、然れども個人的無政府主義の如く精神に重きを置くことを忘れたる觀なきを得ず。遠き未來の又未來を期する個人的無政府主義の現下の所期は、個人の精神の改革なり。社會の舞臺面の改革よりも、各個人なる俳優の心の改革を第一とするなり。是に於て教育と云ふ重大なる問題とせず。

（八）

若し夫れ誤らざる教育を以て、各個人を涵養せば、彼等は絕對に高く淸く、神の如く心を有するに至らざる迄も、比較的に其精神を高尚にし、優美にして、今の人の如く或る階級の獸類に止まり、動

物的の搏噬を爲すことなきに至らん。乃ち生存競爭の精神を變更して、今の如く悲慘に亂暴且不道理ならざらしむることを得ん。而して是れ個人的無政府主義の所期なる神の如き人に達する所以の階梯なりとす。

蛹は化して、蛾となり、毛蟲は變じて胡蝶となる。生物の脫皮して更に高等の動物となるは、自然界の舞臺の常觀、人爲を以て之に或る催進方法を加ふれば更に其中にて巧妙なる進化を見ることあり。人類の敎育は卽ち是れ此人爲淘汰を自然淘汰の上に增加する所以なり。若し之を誤らずば其淘汰作用を以て、稍や良き馬の中より良き馬を產ましめ、良き馬の中より最も良き馬を產ましむることを得るが如く、凡人の間より秀才を、秀才の間より人傑を、人傑よりして最も高△理想の人を生ぜしむることを得ん。卽ち惡魔よりして天使を生じ、劣情よりして貞操を產む、必無と云ふ可らざるなり。

社會主義は形質上に於ける這般の進化を急進的の社會改革に求め、個人的無政府主義は精神上に於る這般の進化を漸進的の人類敎育に求む、一は外よりし、一は内よりす。此點に於ては唯内外の相違のみ、恐らくは相呼應して人類の向上進步を期することを得ん。

（九）

社會主義の實行せられたる日に於ては、資本家なく地主なく、或る特權を社會經濟の上に有するもののあるを許さゞるの制度を行ふが故に、富者の暴橫跋扈なく、强者の專恣亂行なきことを得、一般の

人民悉く衣服に窮することなきを得べしとせらる。而も尙斯くする所以の制度を執行することを要す。隨て個人に對する社會の干涉を斷つこと能はず、少くとも個人は常に社會の制裁干涉の下に立たざる可らざるなり。

個人的無政府主義の行はれたる結果を想像すれば、各個人皆賢皆智にして悉く神の如き心を有す。敢て社會の制御を受けしずて自から治め、獨立獨行す。即ら己れよりして自ら暴横跋扈することなく、專恣亂行することあらず。天下一人の衣食に窮するが如き運命にある劣者あることなし。故に資本――土地の私有を許すも許さゞるも、特權を以て他人を虐するが如きものなければ、斯る制度は何れも全く無用に歸す。隨て社會の制裁干涉なるものを要せざるなり。

二主義の實行せられたる曉を比較すれば、夫れ斯の如く一は尙政府の如き干涉權を有する權力の中心を要し、之に依りて外よりして制御して天國を製造するにあり。一は一切外部よりするの制裁を要せず、又權力の中心を要せず、各個人自から自由の天國を生ぜしむるなり。一は製造なり、他は出生なり。一は他動的の細工なり、他は自動的の發生なり。一は人の造くる所にして他は我が造くる所なり。

（十）

而かも此二主義は何れも現下の狀態よりして見れば、唯理想なり。幾んぞ夢の如き空想に似たるや

も知るべからず。耶蘇教徒で天國は近付けりと呌ひながら、何時にも其實現なきが如く、何れの主義の天國も今は唯之を夢に見るを得る耳。

是に於て乎、社會主義は其純粹ならざる國家社會主義に姑息し、個人的無政府主義は奇道を歩みて隱遁主義を主張するの已むを得ざるに至る。是等は何れも其主義の甚だ微温なるものなり。前者は國家の力を藉りて僅に資本家、地主の跋扈を警戒し、多數人民の不幸の幾分を辛うじて少しく救濟するに止まり、後者は一般の個人の度し難きに呆然として、國と權との上に超然として山林に獨嘯するか、世と俗との下に沒然として陋巷に隱棲するか、二者其一を擇み、僅かに其主義の貫徹を期す。前者は世と倶に移りて敢て汚に染むを辭せざらんとし、後者は唯己れ一身を己れの欲する所に任せて之れを屑くせんとず。高尙なる二主義も玆に至りては其不運なる、憫む可らずとせんや。

而かも亦一直線に進みて其主義の精神を傳へ、飽く迄も其實行を期せんとする三昧の論者なきにあらず。今の純粹なる社會主義者、我國に於ては平民社諸子の如き其一なり。而して個人的無政府主義に於ては歐洲には既に其人あり、スチルネルの如きアウベロン、ヘルバルトの如きニイチエの如き――其說く所は一ならざれども、卽ち是れなり、我國にては未だ一人の之あるを見ず、余の如きも亦夙に此理想を有せしかども、今日初めて僅かに之を玆に語るを得るのみ。此點より見れば余は方に日本唯一の無政府主義者なるべし。

而かも唯是れ眞に理想としてなり。今俄に之を行はんとするにあらず。行はんとしても亦行はるべき時代にあらず。或る階級の猿猴は未だ全く脱皮したるにあらざれば、人として完全なるにあらず。況んや神の如き人としてに於てをや。

（十一）

然らば今は一歩を退きて、社會主義に與みし、外よりして生活の天國を地上に建つるに盡力する、亦可ならんと云ふものあるべし。然れども嚴正なる論理を以てすれば我主義は之を許さず。我主義は即ち個人の完全なる自由獨立を理想とす。資本——土地の私有を禁ずと云ふの思想は方に此理想に矛盾するなり、命令禁止等外制的の組織を須ひずして、個人の高潔なる自由意志を以て財産物品の自由使用あるに至らしめざる可らず。神の如き人とは一切自動的にして制せられず制せず、而して毫末も僞善なく虚儀を見ざるを云ふ。私有制の禁止は此人格を累する所以たるを免れず。

今日にても財産金銀に頓着せざるものなきにあらず。家財を傾けて美術に抛ち、遊蕩に棄つるものあり、稀れには慈善の爲に家を捨つるあり、是れ無意識ながら自由意志を以てする私有財産無差別觀の傾向なり。神の如き人——個人的無政府主義の實現せられたる世の人は、財産私有制の禁不禁の境界に超絶したるものなり。我が有も我が有に頓着せざること今の私有財産無差別觀の傾向あるものに似て、而かも其圓滿完全なるにあり。而して此超絶の境を理想となすものは、私有制の禁不禁を談ず

るが如きを以て、未だ我が境に達せざるものとして唯其進來を俟つ耳。

（十二）

然れども社會主義の實行は、現下の社會制度に於ける資本――土地の私有競爭を除き、之を競爭なき公有に移すを以て、事容易に運ぶを得べし。今日の如き貪慾なる亂暴なる人の皮を着せる巨猿が、獨り社會に跋扈せる時にありては、之も左程容易にはあらざるべきも、而かも天下の個人を悉く賢悉く智にして神の如きものたらしむるの業に比せば、誠に易々なるべし。社會主義は卽ち個人的無政府主義よりも、其實行容易なり、隨て前に行はるべきものならん。而して個人的無政府主義は是れ人類進化の極致なる可し。卽ち人が最上圓滿なる發達を遂げて、完全自由なる域に達せる時なればなり。

故に個人的無政府主義は、現下の人類の精神的方面に於ては最上の理想なり。社會主義は亦人類の社會方面に於ける最上の理想なり。而かも前者に比すれば前後一歩の差ありと云はざるを得ず。乃ち社會主義前に立ち、個人的無政府主義奥に位し、前隊後衛の關係をなすに似たる可し。前衛の戰術と殿軍の軍略とは自から異なるものあるが如く、社會主義と個人的無政府主義との說く所亦同じからず。同じからずと雖、然れども同じく是れ人類の向上進步の爲めに孤軍を提げての進軍なり。而して其異る所は方面の同じからざる也。部分の相違のみ。論理學に所謂正反對にあらざる也。

（完）

明治三十九年十一月十三日印刷
明治三十九年十一月十六日發行

無政府主義

定價金五十錢

著者　久津見忠息

東京市本郷區弓町一丁目二十六番地
發行人　熊谷千代三郎

東京市芝區新櫻田町十九番地
印刷人　岡千代彦

東京市芝區新櫻田町十九番地
印刷所　自由活版所

不許復製

發行所　東京市本郷區弓町一丁目二十六番地
平民書房

賣捌所　東京堂、上田屋、中庸堂、前川文榮閣
東海堂、良明堂、警醒社、杉本（大阪）

内田魯庵譯　トルストイ翁の名著

イワンの馬鹿

全一冊　代價郵稅共　金貳拾錢

功名に悶へ、富貴に渇するもの、願はくはイワンの馬鹿の生涯に鑑みて、人生の平和歡樂は、決して權勢黃金に宿らざるを悟れ。譯者はトルストイズムの信者に非ざれども、イワンの敎訓が、社會の濁泉を飲んで惱める輩に與ふる一服の清涼劑たる可きを確信す。（著者序文）

堺利彥著

半生の墓

全一冊　一冊代價郵稅共參拾五錢

（目次）予の半生▲哀史梗概▲永久の滿月▲不知往列傳▲風流乞食▲其他數篇

本書は著者の亡き妻の一週年紀念として發行せしものにて卷中「予の半生」に於て自ら半生の經歷を語る宛然是れ哀史・

斯波貞吉著

智識と趣味

全一冊　一冊代價郵稅共參拾五錢

科學、哲學、宗敎、政治、文學、地理、統計、現代最新の智識は收めて此中にあり。滑稽諧謔、頓才、諷刺世界最大の趣味は集めて此中にあり

高村貞夫書
樋口配天著

わか草

全一冊　一冊代價郵稅共參拾錢

我志初め天下の經綸にありしを、一度人生の煩悶にふれてより我胸の響は潮の如く盡きず。蓋し常へに止まじ我は今より此響を自我に合はし人生に調べて一の譜を奏でんと欲する也本書の中に集めたるは我初て奏で出したる譜也（自序）

中島孤島著

新氣運

一冊代價郵稅共四拾錢

現代の青年男女をして、現代の思想より脫却し、更に一新生面を人生觀上に開拓せんとしたるもの、其トルストイ翁の感化を受けしものなりと稱すと雖も蓋し評家としての氏が自己が理想の一新生面を詩上に書きしものならんか

發行所　東京市本郷區弓町一ノ二六　（爲替東京眞砂町局宛）　平民書房

LIBRARY OF CONGRESS
0 020 208 539 8

平民叢書

B二六
愛知

Japan
2/14/13
63
museifushugi 008800
00202085398